MIGNON ミニョン

永遠の聖少女、ミニョンに捧げるアンブロワーズ・トマのオペラ

首都オペラの2011年公演は1866年、パリのオペラ・コミック座で初演されたアンブロワーズ・トマ(1811−96年)作曲の3幕物「ミニョン」を手がける。ミニョンの「君よ知るや、南の国」は数少ないメゾソプラノのアリアで、単独の名曲として生き残っている。

原作はドイツの作家ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの教養小説「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」、1796年に出版された。演劇人志望の青年ヴィルヘルムの遍歴の途上に出遭った、男の子の服をまとい、イタリア語とフランス語まじりのたどたどしいドイツ語を話すサーカス一座の少女がミニョンである。ヴィルヘルムがミニョンを子ども扱いするのに対し、ミニョンはヴィルヘルムを明らかに愛していた。そもそも病弱だったミニョンは度重なるヴィルヘルムへの“失恋”の果て、心臓発作を起こして死んでしまう。

葬儀ミサでは、特殊な処置を施した遺体が「まるで眠っているようだ」と皆を驚かせるが、そこにミニョンの「永遠性」の鍵もある。ミニョンの十字架像の刺青は、侯爵の実弟の修行僧で、最後は年老いた吟遊詩人として自ら命を断つ男の実子だった事実を明らかにした。

後のプッチーニ作品のトスカ、チョウチョウサン、リュウといった薄幸の女性の先駆けとなる永遠の聖少女、ミニョンは多くの作曲家にも霊感を与えた。オペラではトマが有名だが、シューベルトはゲーテの詩による歌曲「ミニョンに」D161、シューマンは独唱と合唱、オーケストラによる宗教音楽「ミニョンのためのレクイエム」作品98bを書いている。

トマ作品の台本作家、ミシェル・カレとジュール・バルビエはゲーテの原作に大幅な脚色を加えた。ミニョンの実父の名ひとつ挙げてもアウグスチンからロターリオに変わるなど「第2の創作」の様相を呈しているが、最大の違いは結末にある。原作はミニョン、実父とも死に、ヴィルヘルムは別の女性と結婚する。だがオペラは全員が命をとりとめ、ヴィルヘルムとミニョンが結ばれる。柔らかく温かな音楽に包まれ、ハッピーエンドへと向かうフランス語歌劇の名作である。

池田卓夫　音楽ジャーナリスト

指揮：渡辺 麻里

演出：三浦 安浩

背戸 裕子

勝倉 小百合

山口 佳子

古嵜 靖子

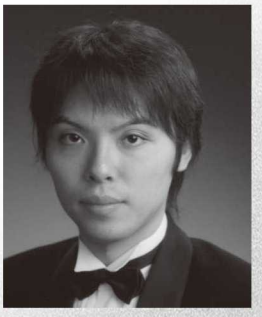
土師 雅人

大野 光彦

飯田 裕之

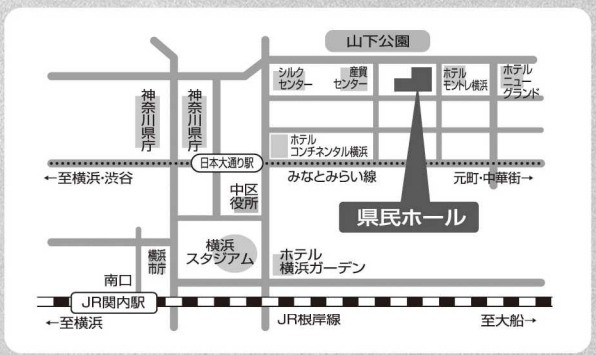
押見 春喜

根岸 一郎


岡村 一樹

相澤 圭介

上田 飛鳥

鈴木 美恵子

安念 奈津